The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	認識論的問題としての環境問題
Author(s)	紀平, 知樹
Citation	臨床哲学. 2002, 4, p. 120-131
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7996
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

認識論的問題としての環境問題

紀平知樹

1　環境問題に対する実感

環境の危機が叫ばれて既に久しい。新聞やテレビなどでもたびたび環境問題の特集が組まれたりしている。また、21世紀は「環境の世紀」であると指摘されることもある。確かに、政府、企業のレベルで環境問題に対する取り組みは徐々にではあれ、すすめられているように思われる。しかしわたしたち一人一人の生活のレベルまで降りてきたときに、環境問題に対する取り組みはどうであろうか。例えば「環境倫理学」という授業で、受講している学生に環境問題についてどう思うかというような質問をしてみると、多くの学生は、「環境が危機に瀕しているということはテレビや新聞を通して知っているが、実感がなく、また何をしてよいかわからない」とか、「自分一人が環境によいことをなにかしたとしても、それほど効果があると思えない」というような答えを返してくる。しかしこのような答えはわりとごく一般的な答えではないだろうか。もちろんゴミの分別、「環境に優しい」商品を購入する、省エネを心がける、アイドリングストップをするなどして、環境問題に熱心に取り組んでいる人たちがいるということも否定はしない。否定はしないが、そのような取り組みが急激に広がっているようには思えない。この原因はどこにあるのだろうか。その原因のひとつとして、先の学生の答えの中にもあったように、環境破壊に対する実感のなさというのがあげられるのではないだろうか。それではなぜ実感がないのであろうか。例えば、私が実家に帰れば、子供の頃に木が生い茂っていた山が、いまでは住宅地になっているのを目にする。例えば、そのような光景を見て、緑がなくなったことを残念に思う。しかし、それによって環境破壊が起こっているのだ、とまでは考えない。しかし実際には、木が伐られて、住宅地が造成されることによって、そこの生態系は壊滅的な被害を受けているはずである。それゆえに明らかに環境破壊が起こっているということになるであろう。しかしもしそうだとしても、つまり山がきりひらかれ、住宅地ができることによって環境破壊が引き起こされたところで、いったいわたしにどのような影響が及んでくるのか、ということは明らかではない。あるいは、そもそもわたしに影響があるということすら不確かではないだろうか。

またここ数年夏の暑さは厳しくなる一方で、最高気温が37度や36度ときいてもそれほど驚かないようになった。例えば2001年の6月に大阪で最高気温が35度を超えた日

は、11日ある。ところが1981年の８月では、３日しか35度を超えた日はなかった[1]。もちろんこれはたんなる一例に過ぎないかもしれないが、気象庁の発表でも、この100年間で日本の平均気温が約１度上昇しているという報告がある[2]。明らかに気温の上昇により、とくに夏は生活がしにくくなっているという実感は多くの人が持っているのではないだろうか。しかしわたしたちがそれをきっかけにして環境問題を考えるということにはなっていないように思われる。むしろエアコンの設定温度をさらに下げることを真っ先に思いつくのではないだろうか。

なぜ環境の劣化を目の当たりにして、環境の改善に取り組むという行動にわたしたちは向かわないのだろうか。そこにはおそらく様々な要因が絡まり合っているであろう。例えばわたしたちのいま現在の豊かで、便利な生活を手放すということになれば、おそらく誰もがなんらかの抵抗感を感じるであろう。つまり環境の劣化に対する危機感よりも、現在の生活を手放すことの抵抗感のほうが勝っていると考えられる。環境問題を論じる文献においてたびたび指摘されていることではあるが、環境問題とは、その被害が明らかになるという意味では、いま現在の問題ではなく、50年、100年後の問題であるということができるであろう。仮にわたしが今日、ここで何かを行ったからといって、よいものであれ、悪いものであれ、その影響が明日目に見えるような形で現れてくるというものではない。環境問題とは、今日、ここで行ったことが、例えば50年後、あるいは100年後、ここではなく、どこかで影響を及ぼすかもしれないといった類の問題である。それゆえに、実感から行動を起こすということは難しいと思われる。ことに、いわゆる自然から離れて都市生活を送っている人間なら、なおさらのことではないだろうか。

環境倫理学においては、「現在世代は、未来世代の生存可能性に対して責任がある[3]」という世代間倫理が論じられているが、これは環境問題の性格に由来する、環境倫理に特徴的な事柄であろう。しかしその際にいわれている「責任」ということは、ほかの倫理学で用いられている責任と同じなのであろうか。湯浅慎一氏はこの点を指摘して、「伝統的な倫理学は倫理主体が意志の主体として人格であることを強調するが、ここに見る環境内存在の責任の所在は、明らかに意志から認識へと移っている[4]」と述べている。ここでは責任に関する議論に深入りするのは避け、認識（知ること）と行為（行い）の乖離について考えていきたい。特にこのことを地球温暖化の問題に即して考えていくことにする。

さて、ここでいう認識とは、明証的な認識ではない。つまりつねに不確実性を伴った認識である。例えば地球温暖化の問題にしても、その主要な原因は二酸化炭素の排出量の増加であるといわれるが、それに対する批判も多くある。また世代間倫理ということに関しても、本当に将来世代はわたしたちと同じような価値観を有するかという疑問が提出されることもある。二酸化炭素の排出量と温暖化の因果関係を明らかにするためには、非常に複雑な計算が必要であり、現在それを確実に算出することはできないといわ

れている。また世代間倫理に対する批判についても、わたしたちが将来世代の価値観を知ることができない以上、その批判が当たるという可能性も残されている。従って、この問題に関する認識はつねに不確実である。またそこにわたしたちが認識を持っても行為に向かえない（あるいは向かわない）理由もあるのではないかと思われる。

それではいかにしてこのような困難を克服し、わたしたちが環境問題に積極的に取り組むことができるようになるのだろうか。あるいはまた、環境問題に取り組むとして、わたしたち一人一人がどのような取り組みを行うことができるようになるのだろうか。このことを考えてみたいと思う。

2　地球温暖化問題

すでに様々なところで説明されているが、まず地球温暖化のメカニズムについて確認しておくことにする。

地球上で生命が生きていくことができるのは、大気のおかげである。この大気によって、地表の平均気温は約15度に保たれている。もしもこの大気がなければ、地表の平均気温は、およそ零下18度ぐらいまで下がるといわれている。例えば大気の厚い金星では、地表の平均気温は、約477度といわれているし、また逆に、大気の薄い火星では、地表の平均気温は、およそ零下47度といわれている。どちらにせよ、生命にとっては過酷な条件であり、地球上のように生命が豊かに繁殖することはないであろう。

この大気の主成分は、窒素と酸素であるが、地球温暖化の問題を考えるときに重要になってくるのは、この主成分ではなく、ごく少量含まれている二酸化炭素などの温室効果ガスである。例えば京都議定書において温室効果ガスとされているのは、二酸化炭素、メタン、亜酸化窒素、ハイドロフルオロカーボン、パーフルオロカーボン、六フッ化硫黄の6種類である。

地球は太陽からのエネルギーを受けている。そしてそれと同じだけのエネルギーをまた放出している。しかし、地球には大気があり、その大気がいわば温室の役割を果たしており、一定程度のエネルギーの放出を防いでいる。その役割を果たしているのが、温室効果ガスである。大気中における温室効果ガスの割合が大きくなればなるほど、放出されるエネルギーの量が減り、その分だけ地表の温度が上昇する。これが地球温暖化の仕組みである。

とくに現在さまざまなところで議論されているのは、二酸化炭素の増加である。この二酸化炭素の増加に関してもさまざまな原因が絡んでいる。まず、主な原因としてあげられるのは、石油などの化石燃料の使用によるものである。わたしたちの現在の生活は、この化石燃料ともはや切り離せないことは明らかであろう。例えば、夕方になり、暗くなればわたしたちは電灯をつける。しかしその電気は主に火力発電によって産み出されたものである。また自動車に乗ればガソリンを使うことになる。さらに、20年前

なら、各部屋にエア・コンディショナーがついている家というのはかなり珍しかったのではないかと思われるが、現在では、それもそれほど珍しいことではないであろう。このようにしてわたしたちの生活は、そのほぼすべてが化石燃料を使用することによって成り立っていると考えられる。私の部屋の周りを見回すだけでも、いくつもの電化製品がならんでいる。これら電化製品が増えることによって、当然消費電力も増え、ひいては二酸化炭素の排出も増えるということになる。

佐和隆光氏によれば、1990年の日本の二酸化炭素の排出量は、3億700万トンであり、1人当たりにすると、2.46トンであった。しかし1995年には、3億3200万トンになり、1人当たりは、2.65トンへと増加している。増加率になおすと総排出量で6.3％、1人当たりでは6.9％増加していることになる。他方、そのあいだ欧州のOECDでは、総排出量は0.6％減であり、イギリスでは4.9％減、ドイツでは11.6％減である。アメリカとカナダはそれぞれ5.1％、7.6％の増加となっている[5]。日本の場合をもう少し詳しくみてみよう。例えば1999年の二酸化炭素排出量の内訳を見ると、産業部門が40.3％と一番多いが、民生（家庭）部門で13.0％、民生（業務）部門で12.2％、運輸部門で21.2％[6]となっており、民生、運輸の二つの部門をあわせると、産業部門よりも多くの二酸化炭素を排出していることになる。また1990年度から1999年度の間の二酸化炭素排出量の伸び率をみても、産業部門では0.6％の増加なのに対して、運輸部門では23.0％、民生（家庭）部門では15.0％、民生（業務）部門では21.1％の増加である[7]。

日本でこのように二酸化炭素の排出量が増加している原因は、先にも述べた通り、電化製品の急速な普及と、運輸用のエネルギー消費も伸びていることであるのは明らかであろう。日本では、1970年代のオイルショックによって、企業の省エネは進んだといわれているが、家庭用と運輸用のエネルギー消費は必ずしも省エネになっているわけではないのである。確かにヨーロッパでは二酸化炭素の排出量を減らしている国もあるが、やはり世界全体でみてみるならば、二酸化炭素の排出量は年々増えてきている。

二酸化炭素の排出量の増加は、このような化石燃料の使用によるものだけではない。それ以外の大きな原因としてあげられるのは森林の伐採である。樹木は光合成によって、酸素を作り出すが、そのために二酸化炭素を必要としており、大気中の二酸化炭素を吸収する役割を果たしている。しかしながら、その森林が大量に伐採されることによって、これまで吸収されていた二酸化炭素が吸収されなくなり、大気中に放出されることになってしまうのである。このことが温暖化をうむ原因ともなっている。また気温の上昇によって、サンゴ礁が白化するという現象もみられる。サンゴ礁も水中に溶け込んだ二酸化炭素を固定する役割を持っているが、そのサンゴ礁が白化することにより、二酸化炭素を吸収することができなくなり、そしてまた、これまで固定されていた二酸化炭素が白化によって海水中に放出されることによって、大気中の二酸化炭素濃度が濃くなるということもある。

それでは、大気中の二酸化炭素が増え、地球が温暖化することによってどのような影

響がでてくるのであろうか。このこともまた多くのところで論じられているので、ごく簡単に確認しておくだけにしておきたい。まず地球温暖化の影響でよく言及されるのは、海面の上昇と、それに伴う土地の陥没である。海面は20世紀の間で、平均10センチから20センチ上昇しているといわれている。また21世紀の間には地球の平均気温は1.4度から5.6度上昇すると予測され、それに伴い海面は9センチから66センチ上昇すると予測されている。またマラリアなどの感染病の流行、異常気象の発生、さらに作物の収穫量にも影響がでてくることが予測されている[8]。

3　環境の危機と科学の危機

大気中の二酸化炭素の量は、季節によっても、そしてまた年によっても増減があるが、現在の二酸化炭素の増加は、そのような自然な周期によるものではなく、これまでみてきたようなものに由来する人為的な増加であると考えられる。ことに産業革命以降の科学・技術の発展、市場経済の拡大とそれに伴う大量生産・大量消費・大量廃棄というサイクルこそが地球温暖化の主たる原因となっている。そこから環境倫理学は、科学・技術、あるいは市場経済の批判、そしてそれによって成立しているわたしたちの生活をも含めた文明全体の批判へと向かっていかなければならない。そこで特に批判の対象となるのは、近代において成立した西洋の自然科学であり、またその背景にあると考えられるキリスト教的世界観などである[9]。

しかし西洋の科学や文明を批判するのは何も環境倫理学が初めてというわけではない。19世紀後半から20世紀中頃にかけてニーチェ、ディルタイ、フッサール、ハイデガーなど多くの哲学者が自然科学やヨーロッパ文明の批判を企ててきた。ここでは認識という観点から、近代の自然科学に対する批判を行ったフッサールの議論を見ておくことにする。

フッサールの哲学的課題はさまざまに林立している諸学問に対して、唯一の絶対的基盤を与えることであったということができるであろう。裏を返せばそのことが意味しているのは、フッサールの眼には、諸学問には絶対的な基盤が欠けているというように映っていたということである。彼の著作はそのほぼすべてを科学批判として読むことも可能であろうが、特に『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』と題された書物は、まさに西洋の諸科学に対する批判が全面的に展開されている。そこでフッサールの批判の矛先は、ガリレイとデカルトによって形成された近代の物理学と、その根底にある数学とに向けられている。そこで特に問題となるのは、過度の形式化のために、自然科学が提示する世界が、わたしたちの生（生活、生命）にとって意味を失ってしまっているということであろう。というのも、自然科学が提示する世界は、数値化された世界であり、実際にはわたしたちの目には見えていない、あるいは、感じられていない世界だからである。例えばわたしたちは、今日の気温を数値化された温度によって感じているの

ではなく、むしろ、昨日よりも暑いとか、あるいは今日は空気がべとついているとかなどとしてまずは感じているはずである。つまり数値化された、客観的な世界の経験に先立って、主観的、相対的な世界の経験をわたしたちは行っているはずである。そのような世界をフッサールは生活世界とよび、自然科学によって提示される世界は、この生活世界を「理念の衣」によって覆ってしまうものであると述べた。そしてそのことによって自然科学はわたしたちの生に対する意味を喪失してしまったのであると批判したのである。

この批判は、自然科学のみならず、自然科学からでてくる技術に対する批判でもある。つまり熟練の技、などといわれる場合の技倆(Skill)ではなく、まさに自然科学の成果によって成立する技術(Technology)が問題なのである。フッサールが具体的に挙げているのは、幾何学と測定術との関係である。幾何学が扱う三角形や四角形といった図形は、その定義上、わたしたちの経験に与えられるものではない。しかしそれが客観的に実在しているかに思わせるのが、測定術である。フッサールは次のようにいう。

> 「哲学的な」認識、すなわち世界の「真の」客観的な存在を規定する認識を自覚的に得ようと努力した結果、**経験的な測定術**とその経験的、実用的な客観化の機能とが、その実用的な関心を純粋に理論的関心に転化させることによって、**理念化され、純粋幾何学的な思考作用へと移っていった**、ということが理解される。こうして測定術こそが、結局は普遍的なものとなる幾何学と、その純粋な極限形態の「世界」との開拓者になるのである。[10]

あるいはまた、次のようにもいう。

> 数学は測定術と結合して現れ、いまやそれを指導しつつ－そうすることによって数学は、理念的な対象の世界から、再び経験的に直観される世界へ下降するのであるが－、**直観的現実的な世界の事物について**、しかも形態の学としての数学のみが関心を持つ側面（その側面にはあらゆる事物が必然的にあずかっているのであるが）に関して、全く**新しい性質の客観的実在的な認識**、すなわちその固有の理念的な対象に**近似的に**関係している認識が得られるということを示したのである。〔中略〕純粋数学と実用的測定術によって、人は物体の世界におけるこのような広がりを持ったすべてのものに対して、**全く新しい帰納的予見**をなすことができる。すなわち人は、そのつど与えられ測られた形態的な出来事から出発して、知られてもいないし直接には決して測ることもできない出来事をも、異論の余地のない必然性を持って「計算」しうるのである。こうして**世界に縁遠かった理念的な幾何学が**、「**応用**」幾何学となり、ある点では、実在認識の一般的方法となる。[11]

つまり幾何学が扱うような、わたしたちの経験に実際には与えられないような対象と、わたしたちの経験に実際に与えられている対象とをつなぐのが経験的測定術であり、それによって幾何学の応用も可能になり、また世界は客観的に「真なる」世界として自立することが可能になるのである。

このような批判を自然科学による環境破壊と結びつけるのは容易であろう。つまり自然科学によって提示された世界を「真の世界」と見なすことによって、自然科学はわたしたちの生から独立し、自立的に発展を遂げることが可能になったのであり、さらにその「真の世界」はそもそも自然科学によって構築された世界なのであるから、自然科学によって、その世界を統御することも可能であるという幻想も生まれることになる。そして、このような幻想は、現在の環境の危機がいつか科学技術によって解消されるという楽観論をうみだすもととなっているようにも思われる。

フッサールは生に対する意味を喪失した自然科学の基盤が、実は生活世界のうちにあるということを提示し、そのことによって、科学の生に対する意味を回復しようとしたのである。確かに自然科学が喪失してしまった自己の基盤を回復することは、科学自身のありかたに変様を迫るものであろうし、そのような科学は、環境破壊的であるよりは、環境宥和的でありうるようにも思われる。というのも、自然科学がわたしたちの生にとって意味を持つというとき、そこでいわれている生とは、まさにある環境（生活世界）の中で営まれている生なのであって、もしもわたしたちの生が、他の種の生とは異なる特別な生であるとしても、しかしわたしたちの生が環境を構成する一要素であるということには疑いを差し挟む余地はない。そしてこのわたしたちの生は、有機体であれ、無機物であれ、他の構成要素との相互連関（例えば呼吸や食物連鎖といった生態系や社会といった共同体において）の中でのみ営まれうるものだからである。従って自然科学がわたしたちの生に根付いた科学として成立したとするならば、そのような科学は、わたしたちの生の連関すべてにとって意味を持つような科学になるであろう。

以上みてきたように、環境の危機は、現在のわたしたちの生活を成り立たせている自然科学および技術を含めた文明に対する批判と、そこからでてくる新たな文明の形成へと向かわせるように思われる。しかしことはそれほど単純なのであろうか？

いまわたしは「現在のわたしたちの生活を成り立たせている自然科学」と述べた。確かにフッサールは、自然科学と生との乖離に批判の焦点を合わせたのであるが、しかしわたしたちの現在の生活は、その生とは乖離したといわれる自然科学の上に成立しているのであって、その限りにおいては、生と自然科学との間には乖離などないということもできるのではないだろうか。逆説的ではあるが、自然科学が生活世界に理念の衣をかぶせることによって、生活世界は喪失されたのではなく、むしろその理念の衣に覆われた世界こそが、わたしたちの「生活世界」を形成しているのではないだろうか。先にも述べたように、フッサールは客観的に提示された世界に先立ち、主観的、相対的な世界の経験を行っていると述べているし、そのような生活世界こそが自然科学の基盤であるという。しかしそのフッサール自身、自然科学の成果をも含めた世界を生活世界とよぶこともある。

具体的な生活世界は「科学的に真なる」世界に対してはそれを基礎づけている地盤であるが、それと同時に、生活世界独自の普遍的な具体相においてこの科学的に真なる世界を

も包括している。[12]

あるいは次のようにもいう。

> あらゆる実践的形成体（それのみでなく、その関心に関与することを差し控えた場合には、文化的事実としての客観的科学の形成体もそこに含まれるが）を、直接にうちに含む生活世界は、もちろんたえず相対性の変移のうちにありながら、主観性に関係づけられている。[13]

フッサールは、現象学的還元の方法を『イデーンⅠ』において述べる際に、自然的態度と現象学的態度とを対比していたのであるが、後期になると、自然的態度(natüraliche Einstellung)と自然主義的態度(natüralistische Einstellung)[14]を区別し、まず批判されるべきは自然主義的態度であるとしている。そして自然的態度は、むしろあらゆる認識を支える根源的な信念であるとし、一定程度の評価を得るのである。しかしこのようなフッサールの主張は、一方であらゆるものの根源的地盤としての生活世界と、現象学的分析の手引きとしての、つまり還元を施され、そこから超越論的主観性へと遡行するための手引きとしての生活世界という「生活世界の二義性」という問題を生じさせることになる。しかしこの問題に立ち入ることはやめ、フッサールが「超越論的判断中止という態度の転換の中で体系的省察を遂行してきたが、再び自然的態度を回復しようと思えば、いつでも可能なのであって、この自然的態度のままで生活世界の不変の構造を問うこともできるのである[15]」と述べている通り、わたしたちの日常生活における経験に即して、考察をすすめていくことにする。

確かにわたしたちは、今日の気温が25度とか、湿度が60％などのような数値化された気候を経験しているわけではない。先にも述べた通り、まずは暑いとか、べとつくなどといった経験を通しているはずである。それゆえ暑さや湿気などはわたしたちの生活世界を構成する主要な要素である。しかし、そのような感覚に劣らず数値化された気温や湿度もわたしたちは－暑さや湿気などとは別の仕方でではあろうが－「経験」しているのであり、それは数値化されない気候と同じようにわたしたちの生活世界を構成する要素となっているのではないだろうか。つまり暑さや湿気の感覚と同じように、あるいはそれ以上に数値化された気候はわたしたちの現在の生に差し迫ってこないだろうか。例えば天気予報の降水確率によって、わたしは家を出る前に傘を持っていくかどうかの見当をつけるであろうし、洗濯をするかどうかもそれに左右される。また、しっかりと断熱され、そしてエア・コンディショナーによって室温や湿気を調整された家の中に住むわたしたちは、外気の様子を確認するために、やはり新聞の天気欄やテレビの気象情報で気温を確認したりして、その日に着ていく服を調節したりしているのではないだろうか。つまり確率や度数という数値がわたしの生活に有意味に、まさに関連を持ったものとして働いているのである。

従ってもはや生と自然科学といった二項対立的な図式は成り立たないのであって、環境倫理が自然科学に対する批判を行おうとするならば、否応なしにわたしたちの生のあり方そのものも批判の俎上にあげなければならないのである。つまり、自然科学は生にとって関係ないのでもなく、意味がないのでもない。むしろ自然科学を批判している当のわたし自身が、つねに自然科学によって理念の衣を着せられた世界の中に取り込まれているのである。そこでどれほど生活世界を回復せよと叫んでみたところで、いまや自然科学の影響を受けない生活世界などどこにもないのである。むろん、わたし自身の足下にすら、いかなる自然科学の成果も受け付けていないような世界などありはしないのである。むしろこの**わたし自身が理念の衣に覆われた世界をも、わたしたちになじみの生活世界として、あるいは快適な環境として受け入れてしまっている**のではないだろうか。ここにこそ環境問題の困難、つまり「知ってはいても何をしたらよいのかわからない」という問題が潜んでいるのではないかと思われる。

４　経験・習慣・認識

わたしたちの生は二種類の経験から成り立っている。一方は暑い、べとつく、さわやかなどといった身体を通した経験であり、他方は気温 35 度、湿度 60％、降水確率 50％などといった数値化されたものによる経験である。これら二種類の経験は、いまや一方がより根源的であるということではなく、等しい資格を持ってわたしたちの生活世界を構成している。そして生活世界とは、わたしにとっては「馴染み」の世界であって、そこからの脱却はわたしに「違和感」を与えることになるであろう。

さて、環境の危機を認識しても、わたしたちはすぐさまその危機を回避するための行動に移ることができない、という問題に戻ろう。例えば、わたしの身体が異変を来したとしたなら、わたしはすぐさま何らかの処置を講じるはずである。しかしわたしは、環境の危機を認識したとしても、すぐさま、何らかの処置を講じているわけではない。この相違はどこからでてくるのであろうか。わたしの身体は、わたしそのものであって、身体の危機はすぐさまわたし自身の危機として認識されている。しかし環境の危機はどうであろうか。環境の危機をわたしは、それほどわたし自身の危機として感じているのではない。しかし先にも述べたように、わたしの生は、環境のうちにあり、その中で他のものとの相互連関の中でのみ、生きていくことができるのである。それゆえ、環境の危機は、わたし自身の、わたしの生の危機でもあるということができる。それゆえわたしは環境の危機に対して、何らかの対策を講じることも不思議ではないし、おそらくそのことは不可欠であろう。しかしそれができないのである。おそらくその原因は、先に挙げた二種類の経験に基づく二種類の認識にあるのではないだろうか。カントは、そしてまたフッサールも認識は経験から始まると述べた。しかし経験は、まさに現実的に体感することができるような経験と、体感されているわけではないが、それでもまさにわたしたちにとって現実味を帯びたものとして行われる経験とがあるということがここで

は問題なのである。フッサールならば、前者を本来的な経験として、そしてまた明証的な、つまり絶対確実なものとして優先させるであろう。しかしながら先に見てきたように、現在のわたしたちにとっては、等しく本来的な経験となっているのではないだろうか。両者が等しく本来的であるとはいえ、この二つの経験の間には相違があることもまた確かである。それはつまり、確実性（実感）の問題であり、あるいはより具体的にいえば、身体を通した経験であるかどうかということである。

それでは身体を通して環境の危機を実感すれば、それで事足りるということであろうか。ある意味ではそのとおりであるといえるであろう。つまり、わたしたちの生命が脅かされるほどまでに、環境の危機が迫ってきたとするならば、それが手遅れであったとしても、その危機を回避するための何らかの対策をとろうとするであろう。ある意味で、と述べたのは、そこまで危機が迫ってくるならば、ということである。しかし現在の環境の危機は今すぐ生じるというものではなく、数十年後のことである。

おそらく多くの人が年々夏の暑さが厳しくなっているのを身体によって感じているのではないだろうか。あるいはまた冬が暖かくなっているのを感じているのではないだろうか。しかし環境の危機のための対策は遅々として進んでいないというのが現状であろう。それはいまだ環境の危機が目前に迫っていない[16]ということでもあろうが、別の理由も考えることができる。すなわち、この劣化しつつある環境こそが、現在のわたしたちの生活世界なのであり、その中でわたしたちはある種快適な生活を送っているのである。**実感のない認識と、そのような認識もまた私たちの生活世界に根付いたものである**ということ、このことが環境の危機の認識から、危機の回避の行動へとわたしたちを向かわせないものなのではないだろうか。

それでは、わたしたちはこのままこの生活世界の中に安住して、実感のない認識を持つだけでよいのであろうか。確かにわたしたち一人一人が環境に対して貢献できることは限られているかもしれない。すなわち、環境の危機に対する対策を阻むものは、何もわたしたちの実感のない認識だけではないのである。マクロな視点から見てみるならば、市場経済、国益の壁、南北間の貧富の格差といった問題が複雑に絡み合い、その対策を遅らせている。これらの問題をひとつひとつ解消していくことも重要なことである。しかしそのようなマクロな対策と同時に、ミクロな取り組みもまた必要なのではないだろうか。

わたしたちの認識は、突然どこかから降ってわいてくるわけではない。むしろ認識はつねに前提を持つのである[17]。従って認識を変えるためには、前提を変える必要がある。それでは認識の前提とは何であろうか。それはまさに経験に他ならない。ある種の経験の繰り返し、つまり習慣性がある一定の認識を産み出す－あるいは認識とは習慣性の結晶であるといってもよいかもしれない－のであり、その認識こそが生活世界的な現実－それはわたしにとってなじみ深く感じられるものである－を形成するのである。従ってわたしたちの経験を変えること、つまり習慣を変えること、このことによって認識も変

わってくるのではないかと思われる。

もう少し具体的に考えてみよう。例えば、ゴミの分別収集について。ゴミをわざわざ燃えるゴミ、燃えないゴミ、ペットボトルなどに分類するのは、全くなんの分類もせずにいる状態から考えるならば、煩わしいことであろう。しかし、いちどゴミを分別するという習慣を身につけたらどうであろうか。そうするならば、もはや煩わしさを感じなくなり、当たり前のこととしてゴミを分別するようになるのではないか。あるいは歯磨きを考えてみよう。多くの人が、毎朝、毎晩歯を磨いているのではないかと思われる。それではなぜ歯を磨くのであろうか。もちろん虫歯にならないため、そしてまた虫歯になって歯医者に行くのが嫌だから、ということも当然考えられる。つまり健康とコストベネフィットを考慮して歯を磨くということも考えられる。しかしそれよりも先に、歯を磨かなければ気持ちが悪いという感覚のほうが先に立つのではないだろうか。それ以外に歯を磨くことに関して先立つ理由はないのではないだろうか。ある一定の行為を、ごく当然の（自然な）こととして行わせることが習慣性の力ではないだろうか。習慣が「第二の自然」であるならば、その自然を「第一の自然」と調和させること、そのことが環境問題に対するひとつの対策となりうるのではないかと思われる[18]。

環境問題を扱ったものの中で、最近「環境ガバナンス」という言葉を見かけることがある。これは「多元的で多様性を持った主体の存在とその役割を認識し、それぞれの主体が共同して複雑化した政策課題によりよく対応していくという考え方[19]」と定義されている。この環境ガバナンスを押し進めていくためにもわたしたち一人一人がこれまでの習慣を見直さなければならない。どのような認識であれ、それが認識である以上は、その認識を形成している経験や習慣があるはずである。それはまた私たちの生そのものである。その生を見つめ直すこと、そこから新たな一歩に踏み出さなければならないのである。

注

1　いずれも、朝日新聞の気温の欄によって調べた。

2　平成13年1月16日付け気象庁報道発表資料。http://www.kishou.go.jp/press/0101/16a/2000.pdf. またIPCCの報告（第一作業部会「気候変化2001：科学的根拠」）では、20世紀の間で、地球の平均気温は約0.6度上昇したといわれている。政策決定者用の要旨は以下のところで読むことができる。http://www.ipcc.ch/pub/spm22-01.pdf　なお、その全文は次のところで読むことができる。http://www.ipcc.ch/pub/tar/wg1/index.htm

3　加藤尚武，『環境倫理学のすすめ』，丸善ライブラリー，1991年，4頁。

4　湯浅慎一，「環境内存在とその責任－環境倫理の現象学的基礎づけの試み－」，『環境倫理を学ぶ人のために』所収，1994年，世界思想社，106頁。

5　佐和隆光，『地球温暖化を防ぐ－２０世紀型経済システムの転換』，岩波新書，1997年，53頁。

6　環境省地球環境局が作成したパンフレットによれば、この運輸部門の中では、輸送量で5割を占めている乗用車が二酸化炭素の排出量の約8割を排出している。「地球にやさしい乗り物を選ぼう」，

環境省地球環境局，２頁。

7　首相官邸地球温暖化対策推進本部が2001年7月10日に発表した「1999年度（平成11年度）の温室効果ガスの排出量について」による。http://www.kantei.go.jp/jp/ondan/suisinhonbu/010710/pdfs/siryou1.pdf

8　地球温暖化対策推進本部，「地球温暖化対策推進大綱」，平成13年3月19日，4頁。http://www.kantei.go.jp/jp/ondan/suisinhonbu/2002/0319ondantaikou.pdf

9　キリスト教的世界観が、環境破壊の原因であるということについては、異論もある。しかしここでは、世界観の問題ではなく、環境の危機に対してなにをすべきか、ということを論じたいので、世界観の問題、あるいは聖書解釈の問題には立ち入らない。

１０　Edmund Husserl, *Husserliana VI*(*Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie*), Mrtinus Nijhoff, 1962, S. 25.（『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（木田元訳），中央公論社，1974年，44頁）

１１　Ibid., S. 30-31.（49－50頁）この測定術は、単に長さのみならず、次第に味、香り、温冷などのようなものにも拡張されていく。

１２　Ibid., S. 134.（183頁）

１３　Ibid., S. 176.（247頁）

１４　自然主義的態度とは、自然科学による理念の衣を通して世界をみようとする態度である。

１５　Ibid.

１６　しかしこれはすぐに何らかの対策を講じないでもよいということを意味してはいない。例えば今すぐに二酸化炭素の排出量を減らしたとしても、これまでに排出された二酸化炭素がいまだ大気中に留まっているのであり、その効果が現れるのはしばらく先のことである。そういう意味では、環境の危機は目前に迫っているのである。

１７　この発見こそがフッサールをして、発生的現象学へと移行せしめたものであろう。

１８　もう少し具体的に述べておこう。京都議定書で各国の二酸化炭素排出量の削減目標が、EU8％、日本6％と決められた。しかし実際には、地球温暖化を止めるためには、世界全体で50％ほどの削減が必要であるといわれている。いま現在のエネルギー供給源などを考えてみるならば、1950年代の二酸化炭素排出レベルにまで下げなければならない。先にわたしが「第一の自然」と述べたのは、この1950年代レベルのわたしたちの生と自然環境のあり方である。先に環境破壊の原因となっているのは、大量生産、大量消費、大量廃棄というサイクルであるということは述べたが、明らかにこのサイクルは、自然の自浄能力を超えてしまっているのであり、まさにそれがわたしたちの現在の生のあり方ではないだろうか。もしそうであるとするならば、いま現在の生を1950年代の自然に近づける努力が必要であると思われる。

１９　松下和夫,『環境学入門12　環境ガバナンス－市民・企業・自治体・政府の役割－』, 岩波書店, 2002年，vii頁。